

悪役ロールプレイ～主人公の味方になっておいて魔王討伐後に裏ボ
スとして君臨します～

睡眠

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異世界転生した主人公。そこは前世で続編をやれなかつたあるゲームの世界と酷似していた。ある日彼は出会う。この世界の法則に・・・そして気づくこの世界で、自分のやるべきことを。

目次

始まり	1
仲間集め開始	12
処刑	17
舞踏会!?	22

始まり

俺は転生していた。といっても、つい最近思い出したのだ。前世の俺はごく普通も高校生。今世は、王国貴族、伯爵家の次男だ。

現在は13歳。記憶を取り戻したのは半年前だ。記憶を取り戻したその日に気づいた……この世界は、前世にやっていたゲーム、ブレイヴイストリーの世界だと。

この世界は、主人公が魔王を討伐するために仲間を集めて旅をするというありふれた物語なのだが、綿密に編み込まれた伏線、重厚なBGMそして秀逸な文章。それが合わさって、かなり評価が高い作品になっていた……極めつけは、魔王討伐後仲間であったはずの聖女の裏切りにあいそのまま続編へ行くという怒涛の展開で人気を呼んだ。

そして悲しきかな、その聖女と俺は現在進行形で一緒にいる。始まりは、二年前。

当時、屋敷で過ごしているのが何となく嫌で屋敷をこっそりと抜け出して、街をぶらついていった。街に出ると決まって、教会に行っていた。

「今日も来たぞ、神父」

「また君かね……貴族の息子がこんな家でまがいなことを繰り返すものではないと思うがね」

昼間のこの時間帯は基本的に人が居ない。だから、この時間は神父にとつての休憩時間。閑散としたその教会に神父は足を組みしわっている。タバコを吸い、片手には聖書に見せかけた本が握られている。

る。服は着崩しており、とても神父とは思えない。しかも、かなり年を食っているであろう男がやっている。

「相変わらずの不良神父だな」

俺は、先ほどの神父の言葉は聞かなかったことにした。

「信者の前では、しっかりしているよ」

「そういう問題ではないと思うけどね」

「信者の悩みを聞いてやり、心をケアするのが神父だ」

「ちなみに神は信じてる?」

「信じているわけがないだろう」

「やっぱ、神父失格だろ」

そんな会話をしながら、神父とだべり、信者がき始めたら、大通りの露店を見ながらお菓子を探す。その繰り返しをしていた。

ある日、街を歩いていると俺の対面にうずくまっている少女がいるが視界に入った。

年は俺と変わらないだろう。鮮やかな紫色の髪と、やや青みがかつた灰色の瞳が特徴的な美しい少女だ。

紫色の髪は首筋のあたりで、簡素なりボンによって束ねている。

ここまでは問題はなかった。問題は来ているものにある……少女も服は一見、飾り気のないワンピースだが、かなりボロボロになっており完全に面倒事の空気を漂わせており思わず避けたくなる。

しかし、そんなボロボロの服でも、少女は美しい。少女の美しさに

見惚れていると、見るものを吸い込みそうな不思議な青灰色の瞳と、ぱっちり目があった。

少女は俺を見て、視線を露店でさつき買った俺の手の中にある食べ物に移し、苦しそうにそうに眉をひそめた。少女は動かない。俺は少女の近くまで寄る。少女は俺の顔を下から覗き込むようにして、口を開く。

「お腹……………減った」

キュ〜つと、動物の鳴き声のような可愛らしい音が響いた。少女は咄嗟に自分のお腹を押さえる。なんだか納得してしまった。お腹が減ってるのかと。

「食べる？」

そうして俺は持っていた食べ物を少女に渡した。

これが出会いだった。

まあ、なんやかんやで神父に引き取ってもらってこの問題は解消した。しかし、何故かかなり懐かれてしまい、今もよく遊んでいる。記憶を取り戻したあと俺が、子供と一緒に遊べるかと言われると、微妙

なところだった精神が肉体に引っ張られているらしくできなくなっている。

「オ……………オン……………シオン!!!」

「うお、なんだよネリア」

「あなたが何回呼んでも返事がないからです!!!」

ネリアがぐいっと顔を近づけてくる。ネリアの綺麗な顔がやけに近い。

「そ……………それで？今日は何処に行く？」

「そうですね……………森の泉でゆつくりしたいです！」

「そう、じゃあ、そうしよう」

「ムウ……………シオンも少しはやりたいことや行きたいところなどを言ってください。私は口で言ってくれないと分からないので……………」

ほほを膨らませ、私怒ってますとでも言いたげな顔で俺に迫る。

「特にない」

「……………」

今度は、ジト目をしてくる……………表情が豊かなことだ。

「取り敢えず、行こう。かなり時間がかかる」

そう言つて、俺たちは歩き出した。

歩いて一時間ほどで、泉に到着する。泉は、かなり透明度が高くそして周りの景色もいい。まさに絶景だ。

森の中央近くにあり、人里の喧騒など感じさせない。この森は、日本では見たこともないような鳥や動物たちもいる。最初に入った時は感動したものだ。

「うわゝ、凄いですね！いつ見ても。絵本の中にあるような気分になります」

だから、そういう風にはしゃぐ気持ちもよくわかる。くるくるとその場を回り、飛び跳ねながら喜びを表現するネリアを横目に俺は作ってきた弁当を広げる。

「うわゝおいしそうです」

「取り敢えず、飯にしよう」

「相変わらず、シオンの作る料理はおいしそうですね」

「ネリアも作りなよ………経験がものをいうよ」

「それはそうなんですけど神父様は私が作ろうとすると、自分を作るからいいって止めるんですよ。なんでなんでしよう？」

サンドイッチをつまみながら、俺に問いかけてくるネリアに「ネリアの料理がマズすぎるからだ」と突っ込みそうになったが言えなかった。

「さあ？何でだろうね………神父は、ネリアのことが心配なんじゃない

い？」

傷つけないように最低限の情報だけでフォローをしておいた。そんなこんなで昼食を終え、ごろんと芝生の上に寝っ転がる。青空を見ながらふと気になったことを考えた。

何故、ネリアは主人公を裏切ったのだろうか。俺は、ネリアの過去をそんなに深く知っているわけではないが二年も一緒にいる俺から見ても裏切るようには見えない。残念ながら、俺は続編をプレーしきる前に死んでしまったので真相を知らないのだ。

俺の隣で、気持ちよさそうに寝っ転がっているネリアの横顔を見ながら考えに浸る。

「なあ……ネリア。お前は……ッ」

いきなり空気が重く感じた。——瞬間。先ほどまで聞こえていた、森のざわめきは消え失せていた。今の今まで鳴いていた鳥たちの歌も、動物の鳴き声も何もかもが消えうせていた。

無言。無音。まるで生物がそもそも存在していなかったかのような静寂が森を覆った。隣のネリアも確認するが声を殺すところか呼吸すら止めているように見えた。俺らを襲ったのは、自身を覆う空気が凍結したかのような、痛いほどに冷たい『死』の感覚。平和極まりないただの森に存在する事自体が不自然な、あまりにも場違いな空気。

音を立ててはいけない、声を上げば死ぬ。呼吸を止める。鼓動を止める。全力を以て身を隠せ。

本능が身体に全力で囁き掛けて、その動きを無理やりに縛り付ける。気取られた時が、最期。生き残ろうと、必死に足掻く。

俺は、それが俗に殺気と呼ばれるものが引き起こした現象だと気付いた。

そしてそれは次第にどんどん強くなっていく。

——そしてそれはそこに居た。

目の前に現れたのは片目を眼帯で覆った銀髪の中の男だった。俺はそれが誰か知っていた。

「ほう、人間がいたのか………たまたま通りかかっただけなのだがな」

一声………たった一声。本人からすれば、ただしやべっただけ。しかしその重圧は隣のネリアの意識を刈り取った。

「ほう、そこの少女。聖女だな」

「お前は………まさか、そんなはず………」

ネリアの前に立ち、震える足を無理やり立たせる。

「勇敢だな少年………少しばかりうらやましいぞ」

「魔王………なのか？」

「ほう、勘のいい少年だ。その通り、我は、魔王。貴様ら人類に牙をむくものである」

魔王は少し驚いたように目を見開いた。そしてニヤリと笑う。

「少年、名を名乗れ」

「…………シオン…………スノードロップ」

声が震える。足が震える。視界が揺れる。

「ではシオン。我は貴様が気に入った。貴様に選択肢をくれてやる。今から、俺のやることを拒絶しないならその少女は生かしておいてやる」

「やることつてのは、ネリアを殺すことじゃないのか？」

「違う、その少女には手を出さないと誓おう…ただし、ここでの記憶にはふたをしてもらおうだろうがな」

「…………分かった」

そう言った瞬間、俺の片眼は消滅した。

「?あああああああああああああ!!!」

痛い、痛い、痛い、痛い。熱い、熱い、熱い。まるで炎を突っ込まれたかのような感覚に俺は悶える。

「案ずるなしばらくすれば元に戻る…………先に言っておこう。これは呪いだ。忌々しき、愚か者たちが考えた世界の法則。それは、お前に力を与える代わりにお前を変容させる。我の死と連動し完成する呪い」

「何…………を言っているんだ」

「この世界は、150年置きに魔王という存在を生み出す。そういう風にできている。そして、数千年に一度魔神を生み出す」

「魔神……………」

「この世界は、人々の戦争がちょうど泥沼化し始める時期に魔王を召還する。すると一時は戦争は消失する、少なくとも表面上はなくなる。圧倒的な魔王という共通の敵に一致団結して戦いを行うからだ。だが、何千年もすれば人間たちが学習し各国が団結しなくても魔王を打倒しうる力を手に入れる。さらに進化を重ねれば、人間を魔王というシステムでは抑えておけなくなる。文明は発展を続け人々は戦争を続ける……………そうなる前にさらにねじ伏せるための力が魔神だ。魔神は、魔王が死んだとき一度人間側を亡ぼすために作られる」

「話が見えない」

そう言いつつも、何となく頭では理解していた。きっと、ネリアが主人公たちを裏切った理由はこれなのだ。

「簡単に言えば、我が死ねば貴様は魔神となり人類を滅ぼしにかかる……………そこに貴様の意志は関係がない。その呪いは、一人で抑えられるほど緩くない。貴様は、自分の意志関係なく愛する者も友人も敵も、戦友も何もかもを殺す殺人機械になるということだ」

「べらべら、しゃべるんだな」

「せめてもの慈悲だ」

「今俺が自害すればどうなる?」

「……………貴様は死ねない。我が生きている間は呪いが貴様を生かす」

「お前が死んだ後なら殺されはするんだな」

「…………昔の自分を見ているようだな。そうだな、我からの謝罪として一つ教えてやる。我が死んでから貴様が魔神になり切るまでには僅かだが時間がある。本質的な力は魔王である我と同じだ。聖属性の力ならお前を屠れるだろう」

「お前は一体何なんだ？」

「貴様と同じ、世界のバカげた法則に踊らされる道化だ。さつき、我は慈悲で貴様に情報を話したと言ったがそれだけではない。このくだらない法則を貴様が壊せる可能性に賭けたくなっただけだ」

そう言つて、闇に飲まれるように魔王は俺の前から消えた。

一気に脱力する……………なんだか、今まで夢を見ていたように感じる。実感がない。

同時に納得していた。恐らく、これが続編のあらすじなのだろう。聖女はこの呪いを受けていた。この世界では俺がいたから食い違いが生じ、ネリアは呪いを受けなかった。ふと、隣で気を失っているネリアを見た。俺は前世を思い出したがそれは知識のようなもので、この世界はゲームの世界という意識はなかった。はつきり言つて、ネリアにはかなり気を許してしまったし、殺すなんてたまったものじゃない。それは、家族の人間も例外ではない。だから俺は、殺すぐらいなら殺されたい。どうせ、二度目の人生だしな。

その為には、魔王が言っていたわずかな時間を利用するしかない。しかし、ゲームをやっていた俺としては事情を知った主人公には性格上俺は殺せないと思う。

ならば、最初っから悪役になっておけばいいのでは？

……これだ、これしかない。どうせなら、俺も楽しませてもらうぜ
……悪役ロールプレイング!!!

仲間集め開始

魔王の襲撃があった日から2週間がたった。しかしあの日から別段変わったことは何もなく、ネリアもあの日のことは何も覚えていなかった。夢でも見ていたのかと思うが、俺の体の魔力循環は異常に良くなり、剣術も魔法の腕もかなり上達し、父に肉薄するまでもある。この事実が、夢ではなかったのだと教えてくる……。

「なあ神父、魔王にあったって言ったら信じるか？」

「……私は君を昔から見ているが冗談についても無駄な嘘をつくような男ではないことをよく私は知っている。君があつたというのであればあつたのだろう。それで私に何か言うことがあるのか？」

「いややっぱなんでもねえ、もういい時間だし俺帰る」

俺はそう言つて教会を飛び出した。

前回決めたことに変更はない。主人公たちの性格上、俺を殺すことができないだろう。俺は悪役になる。悪役になるにあたってまず最初に考えるのは組織を作るか否かだ。

もちろん答えは決まっている。作るっだ。少数精鋭がいいあまり多くいても御しきれぬ自信はないし、ただの殺戮者を身近に置くのも気が進まない。俺は原作知識から候補を絞り込み、6人を選抜した。6人のうち4人は現在接触可能であり、残り二人は原作が開始しないと接触が難しい。だから俺は今のうちに四人に接触し、組織を作ることを決断した。

まとめるとこんな感じだ。

まず最初は、貴族のルルシア・アストラル。公爵家の娘だが、この国の腐敗に気づいていて人間が嫌い。

次に、ナナリア・アストロメリア。名門貴族の一つであり、階級は侯爵だ。しかし、結婚するのが嫌でシスターになった変わり者であり、作中でもかなりの曲者。根は善良で腐敗の件も知っていて、何かしたいと思っている。

三人目は、ウイリアム。平民だが、成り上がりで貴族なった男だ。しかし、その最後は悲惨で王国の計略により処刑される。あと三日後に。

四人目は、ルークス・アルエル。この男が重要だ。国王の右腕であり、王国最強の騎士である騎士団長に匹敵する実力の持ち主。しかし、彼は幼いころから殺人衝動を持っていて剣を振ることでそれを抑えている。そこをつく。

計画としてはこうだ。

前提としてこの国は、かなり腐敗している。売国貴族どもが他国に情報を買っているし、違法薬物を売りさばっていたり、人身売買に関わっていたりする。第二王子は、このことを危惧し国王とは別に対策を練り奔走しているが長々とこの問題を処理できずに結局解決するのは主人公が魔王討伐の旅をしている間だ。腐敗の真の犯人である国王を第二王子が引きずり降ろし追放し解決する。俺の計画はまず、第二王子よりも先に国王を引きずり降ろし恩を売る。そして、マツチポンプになつてもらおうのだ。俺だって、無関係な一般人は余り殺したくないし、巻き込みたくない。しかし悪役ロールをするには外道にな

る必要がある。そんな、ジレンマを解決する策が権力所をマッチポンプにすることだ。実際は、腐敗の原因を殺すだけだが第二王子にはあたかも反逆者に国王や貴族、その他の人間が殺されたという風に主人公たちに伝えてもらうのだ。

まさに完璧な作戦だ・・・これしかない。

今日中にルルシアに接触。ウイリアムの処刑について教えてやる。そこから、仲間を引き入れる。

俺は王都に來ている。親が王都に行くといふのでこれ幸いといふてきたのだ。最悪一人で行くつもりだったのだが、ラッキーだ・・・。

この時期は、ルルシアは14歳。ちょうど他人への不信感が頂点に達して、一人になるために王都のはずれの教会で護衛もつけずに本を読んでいる。接触にはもってこいだ。

「ここ最近の王国はひどすぎるわ。特に職権を乱用した貴族の横行が目立つし、何人かの貴族は気が付いているはずなのに振り出し、平民も平民よ。冤罪を掛けられている人間が処刑されているってわかってはいるはずなのに公開処刑であんなに歓声を上げるなんて・・・本当に人間はクズしかないのね!!!」

教会では、ルルシアがふわふわとした金髪を揺らし、シスターであるナナリアに愚痴をこぼしていた。

「相変わらず、あなたのお父様は聞く耳を持つてくださらないのですか？」

「ええ、まったく」

「そうですか」

ナナリアは、視線を下に落とした。

「ですが、あまり外でその話をしてはいけませんよ」

「分かってるわよ」

「暢気なものだな」

「ツ……」

不意に、後ろから声がしてルルシアは振り返った。そこには、黒いローブをかぶり道化師の仮面をした男が立っていた。

「あんた何者よ？」

「最近の貴族は、相手の名を聞かぬときに自分の名を言わないのかよ」

「……ルルシア・アストラルよ。アンタの名は？」

「ちよツ、ルルシア？」

ナナリアは、驚いたようにルルシアのほうを見る。名乗ったのが意外だったのだろう。確かに、貴族それも侯爵家の人間が護衛もつけないで名乗るのかなりリスクだが・・・

「相手は、私が貴族だって知ってた。それに・・・こいつはなんだか」

「俺の名は、分け合ってまだ言えないがそうだな・・・道化師クラウンとでも呼んでくれ」

「アンタは何をしにここに来たの？」

「肝が据わっているな。やはり選んで正解だった。三日後にウイリアムは死刑に処される。元論お前なら分かっていると思うが彼は無実だ」

「・・・・・・・・」

「誰もが、お前ですらも彼を助けるのは不可能だと思っているのだろう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「俺なら、救うことが可能だ」

道化師は言い放った。

処刑

広場には、かなりの人数が集まっていた。成り上がり貴族の処刑はそれだけ人間の関心を集めたのだろう。

「彼は本当に助けられるのでしょうか？」

「・・・どうする気なのかしら？」

道化師は、三日前ウィリアムを救えるといっていた。しかし処刑は予定通り行われようとしている。反吐が出る話だ。何より気に食わないのは、平民たちの反応だ。この件が、策略だと分かっている人間は少なくないはず・・・しかし、同調してヤジを飛ばしているのだから救えない。もちろん、苦しそうにしている人間、悲しそうにしている人間も視界に入るが大多数はそうではない。分かっている・・・この場の空気がそうさせているのも理解はしている。だがやるせない。

「処刑を始める!!!」

「この者こそ王国に違法薬物をばらまき他国の患者を引き入れた売国奴である。これは我々王国の怒りの鉄槌である!!!」

処刑台にはウィリアムが柱にくくり付けられている。その表情を見ることが出来ない。

「殺せ」

「殺せ、殺せ」

「死ね売国奴」

ウィリアムに罵声を浴びせているのは、あの貴族が用意した人間だ。彼らは、周りをおおるようにウィリアムに罵声を浴びせていく。それにつられ、平民も罵倒し始める。

「最低ね」

私は、自然と口から言葉が零れた。

「執行せよ!!!」

そう貴族が言い放った瞬間に、ウィリアムに刃が殺到した。

「どういふつもりかしら!!!結局助けられてなかったじゃない!」

教会に戻ってきたルルシアは、ナナリアに叫ぶ。悲痛な悲鳴をナナリアは黙って受け止めた。

「あいつ一体どういふつもりかしら!!!」

「・・・・・・・・・・」

「ナナ?」

ナナリアが自分の後ろを見て目を見開き固まっているのを見て、不審に思ったルルシアは振り返った。

「嘘」

そこには、道化師と死んだはずのウィリアムが立っていたのだ。

「嘘よ・・・・・・・・だってアンタは死んだはず・・・・・・・・」

「ひどい、言われようだな」

「・・・・・・・・・・」

数時間前・・・

——コンコン。

二回ほど、目の前の窓をノックする。俺の背丈の倍以上はある窓は一見質素だが、至る所に彫りこまれた匠の芸術が見て取れる。値打ちのあるものだというのは俺でも分かる。そして、窓の一枚でこれだ。この屋敷全体ではどれほどの価値があるものだろうか・・・・・・・・。きっと俺には想像の付かない値になるのは間違いないだろう。

ノックの返事はすぐに返ってきた。

彼は窓の外にいる俺を見ると一瞬顔をしかめたが、鍵を開けた。

「貴様がこんなものを送り付けてきた男か」

「そうだ、中身は見ただろう?」

俺は、原作に知識から今回の主犯であるこの男の不正の証拠をつかんでいた。それを手紙に書き送り付けたのだ。

「なぜ貴様がこのことを知っているか興味はあるが詮索はせん・・・何が目的だ?」

「ウィリアム・ジャッジの処刑を中止しろ」

「そ、それは出来ない。執行は今日だぞ!」

「出来なければ話は終わりだ」

「ま、待て。他にはないのか!他に要求は?」

「・・・処刑はしてもウィリアムを殺さないことならできる」

青ざめた顔で困惑する貴族。

「それは・・・」

「影武者を用意しろ・・・人形でもいい。どうせ表情までは、民衆からは見えない」

「・・・分かった。受け入れる。ウィリアムを処刑直前で入れ替える」

「ああ、そうしろ。ウィリアムが無事なら俺はお前に干渉はしない」

「・・・約束だぞ」

俺は、二人の看守に半ば抱えられるようにして外に出る。俺があの牢獄に入ってから幾らかの時が過ぎたのか俺には分からない。太陽の光が届かないあの場所では時間という概念すらない感じもされた。それに、拷問により気を失うことも多かったので体内時計も狂ってしまった。あの塔に俺がいたのが、三日なのか、一週間なのか、それとも一か月なのか、それは分からないが、俺が捕らえられた時よりも随分、気温は上がっており、もう寒くはなかった。久しぶりに出た外は眩しくて思わず目をしかめた。少しばかり悪くなった視界で空を見れば青空が見えた。なるほど今日はいい天気だそうで何よりだ。牢屋に入れられたときは抵抗したがもうあきらめがついてし

まった。

処刑台がある広場まで歩く、暫くまともな飯を食ってないのと日頃の拷問のおかげで、もう俺にはそこまで歩くことが出来る体力は残っていないかった。数歩あるけば気を失いそうになり、二人の兵士に脇を抱えられて引きずられるようにして移動するしかなかった。

処刑台が見えてきたところで、道化師の仮面をかぶった男が立っているのが視界に入る。

「話は聞いているだろう?」

道化師の仮面をかぶった男は、看守にそう言い放った。看守は手を離し、俺の拘束を解く。道化師の仮面をかぶった男は看守を先に行かせる。

「ウイリアムだな?事情は、話してやる。ついて来い」

表情は分からないが、その声はひどく楽し気だった。

「自分の処刑を見る気分はどうだ?」

「最悪だな」

事情を説明した後、俺たちは少し離れたところから広場の処刑を眺めている。ウイリアムはひどく不快そうに顔をゆがめ、その目には憎悪をともしていた。

「民衆もひどいが、やはりあの貴族は許せないだろう?」

「ああ、殺してやりたい」

底冷えする憎悪のこもった声で、ウイリアムはつぶやいた。

「チャンスをやろう。ついて来い」

そう言っって、ちょうど処刑が終わったタイミングで広場の方に向かう。

「き、貴様は・・・」

「よう」

「私には干渉しないんじゃないのか!」

「ああ、俺は干渉しない・・・俺はね」

「お前は!？」

「死ね」

鮮血が舞う。貴族の首は吹っ飛び噴水のように血を噴き出している。

「これで、君も悪党だな・・・ウイリアム。貴族、ウイリアム・ジャツジは死んだ。これから先、君は何者なのかな?」

「ただのウイリアムだ」

「では、ウイリアム・・・君はこれからどうする?」

「この王国をあんたが変えられるというのなら、従ってやる」

「ではよろしく頼むよ・・・ウイリアム。ようこそ、悪党ヒーローパーティの宴へ」

舞踏会!?

「それで?これで俺の話を聞く気になったか?」

教会の中でシオンとルルシアは向き合って座っている。シオンの後ろにはウィリアムが、ルルシアの後ろにはナナリアがそれぞれ待機している。

「ええ、あなたは私たちにはできなかつたことを成した。話は聞く価値がある……………」

「良いだろう」

シオンは、そう言って紙の束をルルシアに渡した。

「これは?」

「中身を見ればわかる、それが何を示すのかな」

「ッ……………」

ルルシアは、書類に目を通し驚愕で目を見開いた。

「これって!……………」

「この国の貴族及び商人の汚職、売国に関するデータだ。もちろん俺の知る限りだがな。だが、お前ならこのデータの持つ信憑性が分かるはずだろ?この国の公爵であるお前なら」

後ろに控えているナナリアも息をのんだ。それだけ貴族にとっては衝撃的なのだ。

「……………そうね、私が知らないのもかなりいるけど確かにここに書かれているのは私の知る限り王国を腐敗させる害虫ね……………それで?これだけの情報を持つアンタは信頼に値するつとえばいいのかしら?」

「そうじゃない。相手の正体が分からないで信用するほど愚かではないだろう?お互いに利用し合わないかと言っている」

「利用し合う……………」

「要は、その紙束の意味はお前に対する前金みたいなものだ。今俺が示せる俺の価値。それをどう解釈するかは自由だが……………。俺らはこれから、この国を変える。腐敗しきつたこの国を壊していくと言い換えてもいい。その為に、最も手っ取り早くこの国を変革する方法を

取る。すなわち……………」

「腐敗の原因を物理的に取り除く……………」

「理解が速くて助かるよ。お前には、そのための手伝いをしてもらいたい。お前は、この国の情報を最も収集しやすい立場にいる。アストラル家の諜報能力はこの国では群を抜いている。その情報網を使つて、そこに書かれた貴族の行動から生活リズムまで調べ上げ俺らに流してほしい」

「……………私に対するメリットは？」

「分かっているだろう？お前が、望んだ景色が見られるぞ……………視界にゴミが入らない素晴らしい景色が」

「……………」

（ルルシアは、分かっているはずだ。あの書類に書かれた情報は並の諜報力では手に入れないことを。それに今回の処刑の件で俺の実力は示した。理性では、俺に賭けることには肯定的だ。問題は感情だ。人間というものに冷めきっているルルシアは、誰かに期待をすることを無意識に怖がっている。こればかりは、ごり押しだ）

「ずっと、お前は思っていたはずだ。人間なんてクズしかいないと。うんざりしていたはずだ。この国の貴族の腐敗や平民の救えなさ加減を。理解していたはずだ。ごくわずかでも、まともな人間は存在していてそいつらはこの王国では生きざらくなっていることを……………おかしいだろう？どうなっているんだ？こいつらは、この国は何なんだと」

ルルシアは、何かに耐えるように目をつぶっている。

「……………」

（あと一押しか？）

シオンはまくし立てる様に続ける。

「お前はそう思いつつも変えられなかった。そうだ。ただの子供に変えられはしない。公爵家の娘つでも、たった一人の少女には何も変えられはしない。だが！俺ならば、俺らならば、変えられる。それを証明してやる!!!手を取れ……………ルルシア!!!」

シオンの叫び声で、ルルシアは閉じていた瞼を開いた。

「…………分かったわ、あんたに賭けてあげる」
ついに、ルルシアが折れた。

あまり教会に長居もできなかつた俺らは、次の待ち合わせ場所だけを伝えて別れた。現在はウイリアムと王都のはずれの比較的大きな屋敷に來ている。

「ここは、現在は無人のなっている屋敷だ。本来の持ち主であるフェレス伯爵が王都に來る際に別荘として使っている場所だが、彼は現在体調を崩して療養中だ。人が來ることもない。しばらくはここで過ぐすといい」

俺が、そういうとウイリアムは、片眉を上げ怪訝そうに言った。「なぜこんな場所を知っているのか知らないが……この際、お前の正体は気にしない。だが、腐っても伯爵家の別荘だろう。管理をしているメイドくらいいいのかわ？」

「ああ、それならも問題ない。メイドはかつてはいたんだが今はいない余計コストを抑えたいらしい」

「貴族らしからぬ意見だな」

確かに貴族というのは、見栄を張りたがる生き物だが、領地運営がうまくいかなければそれを優先させざる負えない。実際、そういつた理由から無人になっている屋敷は王都には結構ある。

「まあ、貴族にもいろいろあるってことさ。さて、ルルシアにも言ったが次は一月後。教会で会おう」

さて、比較的順調に仲間も集めたところで次の段階に移行しよう。父上の付き添いで王都に行くという名目だったので、父上の帰還に合わせる必要があり俺は一度領地に帰ってきていた。

朝の訓練を終えて、部屋でこれからについて考えていた。ルルシアは、恐らく俺の手渡した書類に記載されていた貴族について調べなおしかつ、今王都で一番活発に動いているプライドヴェーダ家に目をつけるだろう。

あそこの家は、主に王国の軍事関連の支援をしており、怪しげな魔具を作っているという噂がある。俺は、これが原作知識により、真実だと知っている。この世界には宝具と呼ばれる古の技術力で作られた魔法の道具がある。それは、適正さえあれば、魔法の使えない者でも並の魔法以上の力を行使できるといふつ飛んだものだ……分かりやすく言うなら、一番性能の低い宝具でも、レベル一のスライムでもレベル40ぐらいの勇者を倒せるようになるようなものだ。一つ存在するだけで、かなりの戦力になる。

問題点と言えば、中々適性のある人間が出てこないことだ。

そこで王国や他の国はこれを人工的に作れないのかと考え、模索した。しかし、現在の技術では模倣は不可能であるという結論に達した。だが、プライドヴェーダ家は諦めなかった。執着したと言い換えられる。長きにわたる研究の末……そこにたどり着いた。魔法使いの脳と血液を使い宝具並みの魔具を完成させてしまったのだ。しかし、完成度は宝具に肉薄はするものの本物とはいえない。性能は、宝具のさえ低レベル位。故に彼らは、さらなる研究のために人身売買を行っている。

「本当に、欲深いな……」

「なにが？」

独り言のつもりだったのに返事が返ってきた。横を見れば、妹のセナがいつの間にかいた。

椅子のひじ掛けに両手と顎を乗せて、寄りかかっている。

「……………ノックは？」

「した。でも返事がないから入った」

「もう一回ノックするって選択肢はなかったのか？」

「ない」

悲しきかな間髪入れずにプライベートを否定された。今回は良いけど、俺のもいろいろと入られたら困る状況というのが存在する。できれば気を使ってほしいものだ。

「それより、誰が欲深いの？」

「そうだなあ……………人類？」

「それを言おうと、兄もだけど……………」

セナは呆れたように言ってくる。まあ、その通りなんだけど。

「それはそうだ。分かってるよ。でも、あのくそ貴族と同じにはしないでほしいな」

あんな自分の欲望しか見えてないバカと同じにされるのは心外だ。そういいながら膨らんだ頬を突く。プニプニと柔らかい頬の感触が指に伝わる。

それにしても餅みたいだなあ、と思っていると、扉がノックされた。

「シオン様、セナ様。お父上がお呼びです」

専属の執事の声だ。残念なことに漫画やアニメと違って、普通に年配の執事やメイドさんだ。

イケメン執事や美少女メイドとかは幻だったんだ……………。思わずセナと顔を見合わせた。

「父上が？分かりました。すぐ行きます」

「めずらしい」

セナが言う通り、確かにめずらしい。

「まあ、行ってみれば分かるだろ」

「失礼します」

「来たか」

窓から差し込む太陽の光を背に、重厚なデスクに坐すのは王国貴族、スノードロップ家当主、アルテイル・スノードロップ。俺らの父親だ。俺と同じ黒髪にセナと同じ翡翠色の眼。容姿は整っているのだが、人を殺せそうな鋭い目つきが相手に恐怖を与えてしまっている。

「何の御用ですか？」

「まずは座れ」

俺らは促されるまま、ソファに身を埋めた。俺と向かい合う形で、父上はソファに座った。

「一週間後、王都でアリス殿下の誕生パーティーが行われるのは知っているか？」

「知りません」「知っています」

「え？セナ知ってるの？」

「結構、話題になってる。アリス様はあんまり表に出てこない人だから」

アリス王女。王国の第四王女。王族の中で、この国の現状を理解している人物の一人であり魔法の才能にあふれた人物。かなり容姿も端麗なのだが、王位継承権はないに等しくさらに人と話すのが好きではないためあまり表に出てこない人物だ。ゲームでも、ほとんど出て来なかった。幕間のストーリーでは出てきていたが……。

ただ、続編ではパッケージの表紙に描かれていた一人だ。

重要な人物なのだろう。

「お前たちにはその王女の誕生会に参加してもらおう」
「？何故私たちが？兄上は？」

いかに第四の王女の誕生会と言えども、次期当主である兄が行かないのはまずい。

「ヴァルンは、今別の用事でこの国にいない」

「別の用事？」

「この国にいない？」

俺たちは、二人そろって怪訝そうに顔を顰める。

「色々あつてな……まあ、そんなことはどうでもいい。どちらにしろ、お前たちに拒否権はない。なに、貴族とパイプを作るいい機会だ。渋る理由はないだろう」

面倒くさい……この一言に尽きる。王女の誕生パーティーなど面倒くさすぎる。貴族たちのギスギスした権力争いなど見たくないし、顔も知らない王女の誕生日を祝いたくもない。確かに、貴族とのパイプは重要だし、魅力的だ。しかし、それを上回る面倒くささだ。俺ら兄妹はこういった催しは嫌いだ……騒ぐのは好きだが、気を使わなくてはいけない感じの奴は嫌いなのだ。しかし、悲しきかなそんなことを吐露できるはずもなく

「………分かりました」

言えるのはこの言葉だけだった。

まあ、行くだけなら別に王女に関わることもないだろう。